

長崎大学短期留学プログラムの開始 と今後の課題

松村 真樹

キーワード：短期留学プログラム、アンケート、評価

1 はじめに

長崎大学は、大学の国際化を推進する一方策として、2004年10月に短期留学プログラム（以下、短プロ）を開始した。これは、長崎大学と学生交流協定を締結している外国の大学から、日本語能力の有無にかかわらず留学生を受け入れ、英語による講義を受講させる特別留学プログラムである。短プロ第一期生として来日した14名の留学生が、日本語レッスンやそれぞれの専門分野に関連した科目を受講している。

短プロは長崎大学としては初めての試みであり、また他大学と足並みをそろえるために早急に始められたという背景があつて、開始以後も参加した留学生および受け入れサイドからプログラムの内容や運営のあり方について様々な疑問が投げかけられた。特に、参加者が期待していたものと短プロが提供している内容とが一致しているのかという疑問については検討を要する点が多く残っているように思われる。こうした状況から、プログラムの1学期目を終えた時点で、短プロ第一期生14人に対して中期アンケートを実施した。アンケートは、質問紙を用いた自記式によって行われた。アンケートの項目は、これまでの経過に沿って出発前、来日後、プログラムの内容、そしてプログラム全体に対する現時点での印象という4つの領域をカバーした。本稿では、今回の中期アンケートの結果を概観しながら、後発組としての長崎大学短プロ特有の問題と、短プロが一般に持っている特性から生じる問題の両方について考察することによって、長崎大学短プロの今後の課題を論じたい。

2 短プロ第一期生の概要

長崎大学における短プロ第一期生として来日した学生は合計14名で、その内

訳は、中国6人、韓国6人、そしてマレーシアとタイがそれぞれ1名ずつであった(表1)。長崎という地理的状况によると思われるが、今回の短プロの特徴としていえるのは、中国と韓国からの留学生がプログラム全体のほぼ半数ずつを占めてしまったということである。しかし、短プロが国際交流をその目的のひとつにしていることから考えると、もう少し参加国にヴァリエーションがあったほうがよいのではないだろうか。

なお、短プロ第一期生14人中1名は、当初の予定を変更して、前期(秋学期)が終わった時点で、途中帰国した。その理由は、卒業に必要な単位を短プロで提供されている科目で満たすことができず、帰国後、卒業を一年遅らせるより、やはり同期の学生と一緒に卒業すべきと判断したためである。

表1 2004-5年度長崎大学短期プログラムの受け入れ状況(人数)

| 国 | 協定大学名 | 受け入れ学部 | | | | | | 計 |
|-------|-----------|--------|----|----|----|----|----|----|
| | | 教育 | 経済 | 工学 | 薬学 | 環境 | 水産 | |
| 中国 | 福州大学 | 1 | | | | 1 | | 2 |
| | 复旦大学 | | | | 2 | | | 2 |
| | 同济大学 | | | 1 | | | | 1 |
| | 大連水産学院 | | | | | | 1 | 1 |
| 韓国 | 麗水大学 | 1 | | | | 1 | | 2 |
| | 慶北大学 | | 1 | | | | | 1 |
| | 釜慶大学 | | | | | | 2 | 2 |
| | 済州大学 | | | | | | 1 | 1 |
| マレーシア | マレーシア科学大学 | 1 | | | | | | 1 |
| タイ | マヒドン大学 | 1 | | | | | | 1 |
| 計 | | 4 | 1 | 1 | 2 | 2 | 4 | 14 |

注：済州大学の留学生は、秋学期のみ参加。

次に、留学生の短プロ参加の動機をアンケートの結果に基づいて概観してみよう(表2)。このアンケートでは、短プロへの参加動機として考えられるものを任意に11項目提示し、その中から主要なもの三つを選んでもらった。また、「その他」の項目を設け、11項目以外の理由があった場合には具体的に書くようになっていたが、記入した回答者はなかった。表2が示すように、参加者全員が「日本語を学ぶため」を選択し、続いて14人中10人が「日本文化を体験する」

を選んだ。また、5人が「日本人と知り合いになるため」を選んでいる。その一方で、「単位の互換ができる」については1人しか選んでいない。短プロが、協定校からの学生を受け入れて、長崎大学で取得した単位が在籍大学との間で互換可能であるということをひとつの利点として掲げているにもかかわらず、ほとんどの参加者がこれをプログラム参加の理由と考えていない。

表2 短期留学プログラム参加の理由

| 主 な 参 加 理 由 | 人 数 |
|----------------------|-----|
| 1. 日本語を習う | 14 |
| 2. 日本文化を体験する | 10 |
| 3. 日本人と知り合いになる | 5 |
| 4. 自分の専門の授業を履修する | 4 |
| 5. 他国からの留学生と友達になる | 3 |
| 6. 将来の就職のため | 2 |
| 7. 日本について別の見方、考え方を得る | 1 |
| 8. 単位の互換ができる | 1 |
| 9. 日本国内を旅行する機会 | 1 |
| 10. 費用が手ごろである | 1 |
| 11. 期間がちょうどよい | 0 |
| 12. その他 | 0 |

3 プログラムの内容

長崎大学では、短プロを開始するにあたって、すべての学部および部局から英語による授業科目を短プロ用に新しく提供してもらうことになった。その結果、第一回目の短プロは表3のような授業科目で構成されることになった。ここで、いくつかの授業科目について少し説明を加えると、教育学部から提供された「異文化比較研究II」は、短プロ開始以前から教育学部の学部生のために存在した科目であり、外国人教員によって英語で講義されていた。今回、短プロ用に英語による授業の提供を求めた際、この既存の科目を短プロ生にも開放する形で提供された。それゆえ、「II」となっているのだが、「I」は今回、短プロ生には開放されなかった。同様に、経済学部から提供された三科目も、すべて既存の科目であり、外国人教員によって英語で行われていたものを短プロ生も、経済学部の日本人学生と一緒に受講するという形で、授業科目が提供さ

れている。

こうした既存の科目を短プロに組み入れることには一長一短がある。まず、日本に留学して来て、英語を母語とする教員による英語の講義が受講できることは、短プロ生にとっては大きなメリットである。その一方で、既存の授業を短プロに組み入れることは、時間割の調整上、少なからぬ困難を生じさせる。特に長崎大学の場合、経済学部は別のキャンパスに位置しており、キャンパス間の移動時間を考慮した場合、経済学部が提供する授業の前後には授業を開設することができないという問題が生じた。その結果、独立したプログラムの時間割としては、かなり歪な時間割を作成しなければならなかった。もしすべての授業が短プロ用に開設されたものであれば、時間割上で多少の入れ換えが可能であるが、一般学生用に開講されている既存の科目では、それができない。また、キャンパス間の移動時間のために、経済学部の授業科目とその他の授業科目の間の二者択一を迫られた短プロ生がいたことも事実である。

表3 2004-5年度短期プログラム科目別履修者数

| 提供部局 | 科目名 | 履修者数 | |
|------|---------------|------|-----|
| | | 秋学期 | 春学期 |
| 教育学部 | 異文化比較研究II | 4 | |
| 経済学部 | 国際関係論 | 3 | |
| | 国際経済学 | | 3 |
| | 国際経営論 | | 1 |
| 医学部 | 環境と健康 | 2 | |
| | 国際医療協力概論 | | 2 |
| 歯学部 | 科学コミュニケーション | 3 | |
| | 日本における最新臨床歯科学 | | 0 |
| 薬学部 | 生命科学入門 | 2 | |
| | 医薬化学入門 | 2 | |
| | 創薬化学入門 | | 2 |
| 工学部 | 機械工学特別講義 | 0 | |
| | 電気電子工学概論 | 0 | |
| | 情報科学入門 | 2 | |
| | 構造工学概論 | | 1 |
| | 日本の社会基盤整備の現状 | | 3 |
| | 材料工学特別講義 | | 1 |
| | 化学の最先端 | | 1 |

| | | | |
|------------------|---------------|------|----|
| 環境科学部 | 環境分子生理学 | 0 | |
| | 地質学入門 | | 7 |
| 水産学部 | 留学生のための水産科学入門 | 5 | |
| | 留学生のための水産科学演習 | | 5 |
| | 留学生のための臨海実習 | | 1 |
| 大学教育機能 開発センター | ポスタープレゼンテーション | 4 | |
| | 祖国文化の表現法 | | 3 |
| 留学生センター | 日本語1 | 2 | |
| | 日本語2 | 4 | 2 |
| | 日本語3 | 3 | 3 |
| | 日本語4 | 5 | 3 |
| | 日本語5 | | 5 |
| | 日本語学I | 11 | |
| | 日本語学II | | 10 |
| | 日本家族の社会学 | 7 | |
| | 長崎で平和を考える | 9 | |
| | 華道 | 8 | |
| | 茶道 | | 6 |
| | 日本の文化・社会・経済 | | 10 |
| | 指導教授 | 自主研究 | 5 |

4 プログラム参加者による評価

先にも触れたが、長崎大学の短プロ実施初年度における最重要課題は、とにかくプログラムを立ち上げ、留学生を受け入れることであった。このため、プログラム開始に必要な英語による授業科目と留学生の数を確保することに重点が置かれ、授業の内容や留学生のバックグラウンドにはあまり注意が払われなかった。こうして始まった初年度短プロは、参加者にどのように受け止められているのであろうか。短プロで提供している授業全般について参加者の意見を8項目の質問によって尋ねた結果、表4が示すような回答を得た。授業の難易度については、ほとんどの学生が難しいとは感じていない。クラスディスカッションについても、2名の学生が参加するのが難しいと答えたほかは、全体的にそう感じていない。また、講師の話す速度や授業の準備についても比較的良い評価を得ており、授業の行われ方については問題が少ないと判断してよい。その一方で、「全体的に授業は興味がある」、「自分の専門に関連した科目が少な

い」、「科目数をもっと増やすべきだ」という項目については、意見が分かれた。半数の学生が、自分の専門に関連した授業科目が少ないと答えており、また、半数以上の学生が提供されている授業科目数が少ないと感じている。これと呼応して、授業が興味あると答えた学生も半数ほどにとどまっている。しかし、提供する授業の多様化や授業数の増加が即、プログラムの充実につながると考えるのは早急である。要するに、留学生のニーズと一致したプログラム内容であれば、授業科目数は少なくても問題とならない。また、一人や二人の受講生で行われる科目を増やすよりも、全体としては科目数が少なくても、それぞれの科目にもっと多くの受講生が参加すれば、国際交流の推進にもつながるのではないだろうか。

表4 短期プログラムの授業内容についての評価（人数、総数14人）

| | まったく そう思 わない | そ う 思 わ な い | ど ち ら と も い え な い | そ う 思 う | 非 常 に そ う 思 う |
|--|--------------------|----------------------------|---|------------------|---------------------------------|
| 「以下の事柄について、右にあげた中から、あなたの意見として最もあてはまるものを選びなさい。」 | | | | | |
| 1. 授業内容が難しすぎる | 2 | 11 | 1 | 0 | 0 |
| 2. 科目数をもっと増やすべきだ | 1 | 1 | 2 | 6 | 4 |
| 3. 興味ある科目が開講されている | 1 | 1 | 3 | 6 | 3 |
| 4. 自分の専門に関連した科目が少ない | 4 | 0 | 3 | 3 | 4 |
| 5. 授業についていけない | 2 | 10 | 2 | 0 | 0 |
| 6. 一般に授業はよく準備されている | 0 | 0 | 0 | 9 | 5 |
| 7. 講義が速すぎる | 2 | 10 | 2 | 0 | 0 |
| 8. クラスディスカッションに参加するのが難しい | 2 | 7 | 3 | 2 | 0 |

次に、プログラムの一学期目を終えた時点で、短プロは、どの程度参加者の期待に沿うものであったのかを聞いた。表5が示すように、14人中10人は、「たぶん」あるいは「そう思う」と回答した一方、3人が「そう思わない」あるいは「わからない」と答えている。同様に、14人中12人が、少なくともある程度は、自分たちの留学目的は達成されていると感じている。また、「このプログラ

ムは日本について何か新しい考え方を提供しましたか」という問いに対しては、12人が「そう思う」と回答し、2人が「たぶん」と答えた。

表5 今回の留学に対する印象（人数、総数14人）

| | そ う 思 わ な い | わ か ら な い | た ぶ ん | そ う 思 う |
|---------------------------|----------------------------|-----------------------|-------------|------------------|
| 短プロは日本に対する何か新しい視点を提供しましたか | 0 | 0 | 2 | 12 |
| 短プロはあなたの期待にそったと思いますか | 3 | 1 | 5 | 5 |
| あなたの留学目的は達成されたと思いますか | 1 | 1 | 6 | 6 |

最後に、短プロ全体について5段階で評価してもらった。図1が示すように、14人中1人は“Excellent”と評価しており、“Very Good”と“Good”がそれぞれ5人、そして3人が“Fair”の評価を選んだ。“Poor”を選んだ留学生はいなかった。このように、全体としては、なんとか合格点をもらえたといったところではないだろうか。ただし、参加者は長崎大学短プロの問題点を鋭く指摘している。最後に参加者によるコメントを紹介しよう。

短プロ第一期生に対する中期アンケートを行った際、アンケート用紙の最後に回答者が自由にコメントを書く欄を設けて、短プロの長所および短所、そし

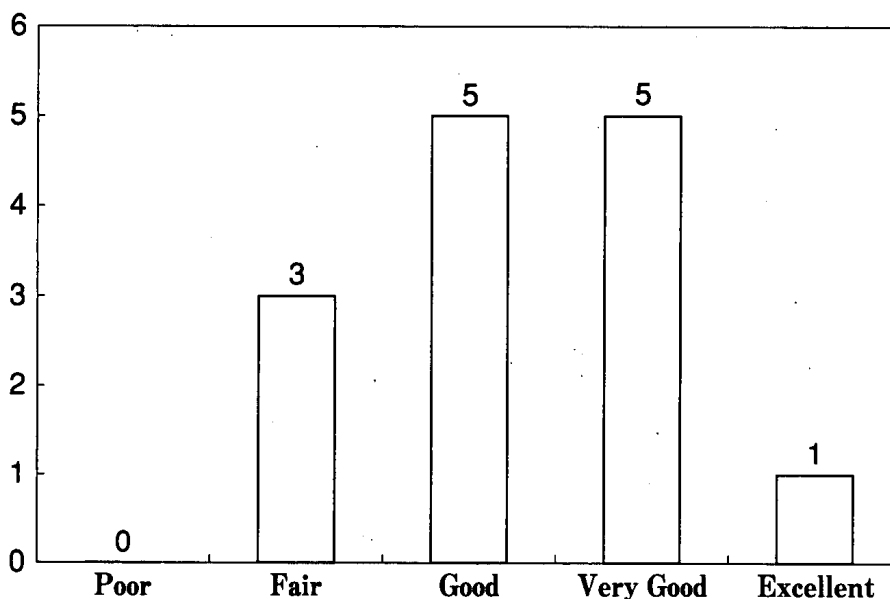


図1 短期プログラム全体に対する評価(人数、総数14人)

て今後このプログラムを改善するためには何をすべきかについて意見を求めた。

まず、参加者が短プロの長所としてあげている点は、ふたつに要約できる。第一に、短プロが留学生に日本語および日本文化について学ぶ機会を提供していること。第二は、短プロが果たしている国際交流の場としての役割である。これらは、以下のコメントが示すとおりである。

What are the strongest features of this program?

- Providing foreign students with chances to understand Japanese culture.
- Providing Japanese courses at several levels.
- There are many courses related to Japanese language and culture which help us understand about Japan more.
- Good chance to learn about Japanese culture.
- We can study in Nagasaki which is a historical place.
- Field trips as well are part of the wonders.
- We can exchange our cultures with other students.
- We can meet students from other countries.
- We can stay with students from different countries.

一方、短プロの参加者がこのプログラムの短所と思う点は何であろうか。ここでも、大きく分けると、ふたつの項目に分類される。まず、各学部から提供された一般科目の内容についての不満である。これには、授業がやさしすぎるというものや、自分の専攻に一致した授業が見つからない、帰国後、単位互換できる科目がない、あるいは選択できる授業科目が少ないといった不満が含まれる。さらに、授業内容が一般的すぎて、自分の大学へ戻った後、卒業に必要な3年次や4年次の専門科目として単位互換できる科目がほとんどないという問題点も指摘された。

第二の短所として、日本語を向上させる機会が少ないことを指摘している。今回、すべての参加者が日本語の習得をプログラム参加の第一理由と考えている。そのため、短プロ留学生だけ隔離された形で英語による授業を履修しなければならない状況を不満に感じている留学生も多い。そのような状況では、日本人学生と接する機会も限られており、日本語を使う時間も少ないので、自分たちの本来の留学目的が達成されないという危惧は、短プロ一期生のほぼ全員が感じているように思われる。

上に挙げた二点のほか、課外活動の機会が少ないといった不満や、また、授業担当者の英語がわかりにくいといった指摘もあった。これらの短所についての具体的なコメントは、以下に列挙したとおりである。

What are the weakest features of this program?

- Courses are too easy; they should be deeper.
- There are very few classes related to my major, so I wonder whether I can meet my major credits after finishing this program.
- This program should have more lectures for us to choose.
- Lack of courses for my major.
- Because all courses are taught in English, I cannot improve my Japanese.
- The medium of learning is English; I want to study with Japanese students.
- There is no chance to study with Japanese students.
- There should be more opportunities to interact with Japanese students.
- There should be more extra activities outside class for international students.
- Very few activities to promote student exchange.
- The teaching faculty, especially Japanese professors, do not have a good command of English, which makes the communication difficult.

最後に、この短期プログラムをより良くするためにはどうしたらよいと思うかについて、参加者の意見を聞いた。様々な意見が出されたが、それらのほとんどは、先にあげたこのプログラムの短所に関連している。まず、授業科目の内容についてである。より高度なレベルの授業を開講すべきであるとか、自分たちの専門分野に関連した授業をもっと開講すべきであるといった意見が目立った。一方、日本語を上達させたいという参加者の希望を反映したコメントとしては、日本人学生と一緒に授業を取れるようにするべきであるとか、日本語で開講されている授業を履修できるようにすべきであるという意見が目立った。具体的なコメントは、以下に列挙したとおりである。

What specific suggestions do you have for changes that we can make to improve this program?

- There should be more difficult courses which use two semesters in sequence.
- Courses should be related more directly to our majors.
- More courses should be added.
- The program should provide more opportunities to study with Japanese students.
- We should be allowed to take courses taught in Japanese.
- There should be more opportunities to feel Japanese cultures, for example, home stay in Japanese families, travel to other famous cities, parties with Japanese groups.
- There should be more joint-classes where foreign and Japanese students can study together.
- The program could be more interesting if students from European countries as well could participate rather than Asian countries only.
- More activities outside class should be provided.

5 今後の課題

長崎大学短期留学プログラムは、2004年10月に開始した。第一期生として14人の留学生を受け入れたが、開始当初からプログラムの運営のあり方に様々な問題を伴った。また、参加者からもプログラムの内容について疑問が投げかけられた。筆者は、留学生センターでこのプログラムをコーディネートする立場から、秋学期が終わった時点でプログラム全体についてのアンケートを参加者全員に対して実施した。さらに、数人の学生から個別に意見を聞く機会を持った。これらの結果を概観して言えることは、参加者の多くがこのプログラムの趣旨についてある種の戸惑いを感じていることである。すなわち、これは日本語習得のためのプログラムなのか、それとも専門科目を英語で学ぶためのプログラムなのかという疑問である。しかし、このような疑問に対して二者択一的に、どちらか一方を答えとして選ぶことは現時点では不可能だと思われるし、また、企画者は初めからどちらか一方を意識していたわけではないとも思われる。あえて言うならば、両方であろう。日本に留学してきた学部レベルの学生に日本語を学ぶ機会を提供しながら、それぞれの専門分野に関連した授業科目も履修できる留学プログラムを想定していたのであろう。ただ、様々な理由か

ら、これらを両立することは容易ではなく、どちらつかずの状態に参加者に受け止められているのが現状ではないだろうか。例えば、すでに指摘したように、日本語の習得が目的ならば、なぜ留学生だけ隔離されて英語による授業を履修するのかという疑問や、また一方で、専門科目の履修が目的ならばなぜ入門的な科目が多いのかといった矛盾が浮上する。

しかし、参加者が希望する授業科目の有無については、こうした留学プログラムの性格上、解決し難い問題を多く含んでいるように思われる。短プロ本来の目的は、学部レベルの留学生に一年間だけ日本の大学で学ぶ機会を提供することではなかったのだろうか。そのため、日本語能力がなくても日本で学ぶことが可能なように、授業が英語で提供されることになった。また、日本で一年間生活するために必要な日本語を身につける機会を提供することも短プロの目的である。このような短プロの基本的理念が応募者にはっきりと伝わっておらず、その結果、すでにかかなりの日本語能力を持った学生が日本語習得のみを目的にこのプログラムに参加することになる。また、来日後に単位互換が不可能なことに気づいて、帰国後、留年を余儀なくされる学生が出てきたりする。

一方、企画者サイドには、プログラムの内容については、あらかじめパンフレットに明記されているので、留学後に学生が内容に対する不満を述べるのはおかしいし、もし自分の留学ニーズに一致しないのなら初めから参加しなければよいではないかという反論があることも事実である。しかし、こうした姿勢が続く限り、留学プログラムの成功はありえないだろう。留学生のニーズを把握する努力が必要である。

例えば、他大学の短プロでも試みられているように、参加者が帰国する直前に、もう一度評価アンケートを行い、その際、どんな授業を履修したかったのかを質問することもひとつの方法である。もちろん、そうして集められた希望にどこまで応えられるのかは疑問である。まず、英語で提供できるかどうかの問題になるであろうし、まして協定大学において単位互換が可能な授業ということになれば、提供できる授業は限られてくるに違いない。また、すでに提供されている授業科目を廃止することも容易ではないだろう。こうして見ると、短プロの制度的制約の中で、様々な協定大学からの留学希望者のニーズを満たすような授業科目を準備することは不可能とは言えないまでも、至難のことであろう。そうではあっても、常に留学生のニーズに注意を払いながら、いずれは長崎大学短期留学プログラム独自のスタイルを確立する方向に進んでいかな

ければならない。

短期プログラムは長崎大学としては初めての試みであり、開始にあたって、その趣旨が明確にされていなかったように思われる。どちらかと言えば、他大学における短プロの形態を真似て、とりあえずそれらしきプログラムを始めることに専念した、といったところではないだろうか。今回参加した留学生もその点を気づいている。その結果、参加者がこのプログラムから期待していたものと、このプログラムが提供できる内容とが一致していないという現状が生じているのであろう。今後、この短期プログラムの目的を再検討し、それを応募者に明確に伝えていくことが必要である。ただ現時点では、「教育とは、習ったことすべてを忘れた後に残るもの (Education is what remains, after you've forgotten everything you learned.)」という説を信じて、第一回短プロ参加者が留学期間中、このプログラムの外で得たものをより多く持って帰国してくれることを望むだけである。

参考文献

- 池田英喜 (2001) 「SSWAN プログラムの現状と課題—初年度を振り返って—」
『新潟大学留学生センター紀要』 第4号 pp.111-116
- 岡沢孝雄 (2000) 「金沢大学短期留学プログラム第1期 (1998年10月から1999年9月) の報告」
『金沢大学留学生センター紀要』 第3号 pp.151-153
- 北浜榮子・近藤佐知彦 (2002) 「大阪大学短期留学特別プログラム OUSSEP のアンケート評価からの考察—英語による講義の問題点と可能性—」
『大阪大学留学生センター研究論集』 第6号 pp.93-112
- 中村和泉 (2002) 「岡山大学短期留学特別プログラム EPOK—3年を経過した受け入れプログラムの現状と課題—」
『岡山大学留学生センター紀要』 第9号 pp.87-106
- 中村和泉 (2005) 「岡山大学短期留学特別プログラム EPOK—'04アンケート調査結果に見る学生のニーズ—」
『岡山大学留学生センター紀要』 第12号 pp.59-74
- 森玲子 (2004) 「大分大学短期留学プログラム2000—2003—英語による科目の現状と課題—」
『大分大学留学生センター紀要』 第1号 pp.81-88

(留学生センター助教授)